

研究ノート

宝満山十三仏磨崖仏 —貞享3年銘の資料について—

高橋 学

はじめに

宝満山は太宰府市の北東に位置する標高829mの山である。独立峰ではなく北は宇美町の仏頂山（標高868m）から南は筑紫野市愛嶽山（標高443m）裾までを含む三群山系の南西部端にあたる。行政区としては太宰府市と筑紫野市に展開している。

西海道の管轄や外交・防衛などの一翼をになった古代官司「大宰府」と密接に関係した信仰の山としてその価値を認められて、平成25年（2013）10月17日に国指定の史跡となった。山中には現在も多くの遺構や遺物が点在しており、山頂部には8世紀後半から国家的な性格を持つ祭祀が行われた痕跡が、山頂部直下の崖面などから出土する遺物の様相から見てとれる。平安時代からは山中や山裾に天台宗寺院と考えられる建物群が建てられ、その周辺に坊跡と推定される遺構が検出されるなど、山中の盛んな宗教活動を想起させる。最澄、円仁が渡海の際に航海安全の祈願を行って以来、天台宗の影響化にあったと考えられている。山中の標高730mあたりにある中宮跡の北側に面している巨岩に、文保2年（1318）の修験道に関わる入峰の記録が刻まれており、この時代にはすでに山中の修験道化が進行していたことがわかる。戦国時代に坊中⁽¹⁾が山中へ移動し、近世を通じて信仰の山として発展した。祭祀跡や堂舎跡、窟、西院谷と東院谷の石垣を伴う坊跡などの遺構の保存状態が良好な史跡である。

立地と環境 今回対象とする十三仏磨崖仏がある場所は、山頂にある上宮から北東に向かって少し下った先の平坦面に座主跡（図1参照）があるが、この座主跡のさらに北東部に水場があり、その北側にある標高800m前後に位置する。ここは座主跡から水場を通り宇美町側の仏頂山へ至る登山道に隣接している。登山道の東側に南北20m、東西5mほどの南北に広がる細長い平坦面があり、その平坦面の東側に面して花崗岩の巨岩が露出している（図2、写真1、2参照）。ほぼ直立したこの巨岩は自然の露頭岩で、やや南に倒れ込んだ方形を呈し高さ約5m、幅5mを測り、南西方向に垂直に平らな面を向けている。この平らな面を

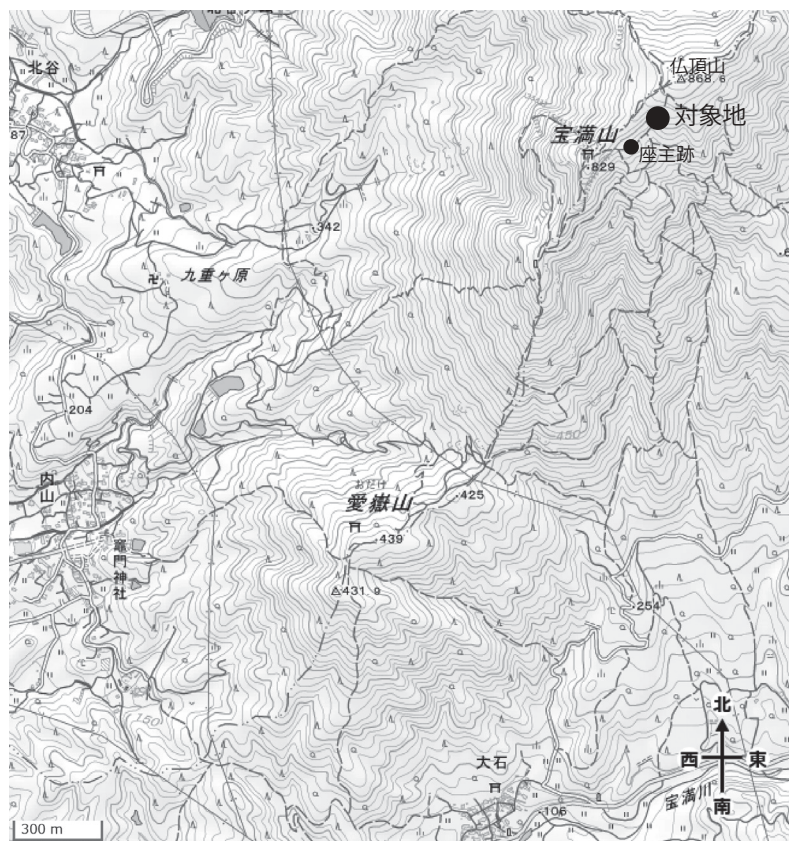


図1 対象地の位置図（国土地理院GSI Maps使用）

利用して地面から3mほどの高さに線刻で天蓋を持つ十三仏の磨崖仏（種子）が彫られており、その下部に碑文1、その右側に並列して碑文2が彫られている。今回は十三仏磨崖仏と共にこの碑文1、2を紹介し、その釈読案を示し、さらに釈読を進めることで、この石造物の位置づけを行うことを目的とする。

研究史 宝満山研究の上で、十三仏磨崖仏を最初にとりあげたのは中野幡能である。中野(1980) P126において、宝満山竈門神社の歴史を記述するなかで座主弘有⁽²⁾による復興の項目内に、「十三仏自然石塔（楞伽院跡から仏頂山へ約300メートルの地点）」とキャプション付きで写真が掲載されている。しかしながら本文中にこれについての説明はない。森(2000) P138～139では「十三仏梵字磨崖」として詳細な資料紹介を行っている。天蓋の下に蓮台にのった十三仏の梵字が岩に彫られていること

やその下に貞享3年（1686）4月の銘文が記されていることを取り上げている。また、下に刻された碑文の右側には平石坊の来歴を記し、左側中央には「伝燈大先達法印喜多院弘有再興」、その左右に山門（京都聖護院）において門跡道晃親王に拝謁し、権大僧都に再任されたことを記しているとしている。その評価として、「一山再興なり、弘有が栄達を極めたときの記念碑である」とされている⁽³⁾。

1. 十三仏磨崖仏について

a. 十三仏種子（写真1. 3）

高所につき採拓が困難であるため撮影した画像を元に考察を行った。画像（写真3）を参考にすると図3のような種子の配列となる。天蓋の直下に虚空蔵菩薩を頂点として、十三仏が並んでいる。最下段の右に初七日を司る不動明王から始まり左へ進み、端に行くと上にあがり右へ進む。右端に達すると上の段にあがり次は左に進んでいき、折り返しながら上に向かい、頂点の三十三回忌の虚空蔵菩薩に至る。興味深いことに五七日を司る地蔵菩薩と七回忌を司る阿闍如来を入れ替えている。十三仏の並びは他例を参考にすると順番が入れ替わること自体は間々あるようだが⁽⁴⁾、この場合、敢えて地蔵菩薩を上位に置いているのは十三仏作成を指示した人物の意図だと考えられる。またこ

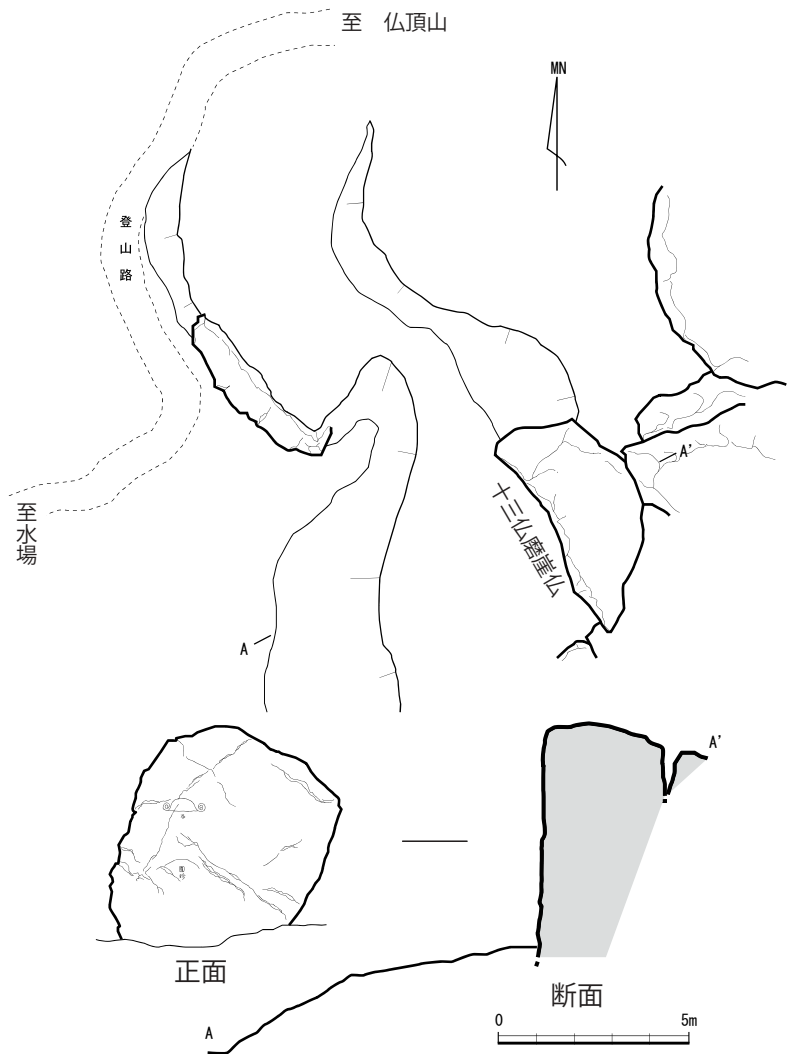


図2 対象地の測量図（山村・中村作図を一部改変）

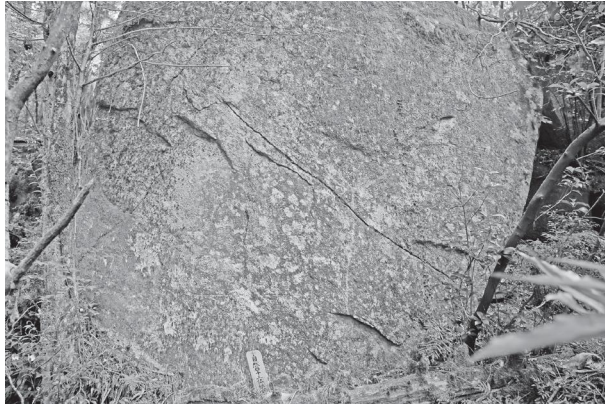


写真1 宝満山十三仏磨崖仏 全景



写真2 宝満山十三仏磨崖仏 碑文部詳細



写真3 宝満山十三仏磨崖仏 種子部



天蓋



三十三回忌：虚空蔵菩薩



三回忌：阿弥陀如来 五七日：地藏菩薩 十三回忌：大日如来



一周忌：勢至菩薩 百か日：観世音菩薩 七七日：薬師如来



四七日：普賢菩薩 七回忌：阿闍如来 六七日：弥勒菩薩



三七日：文殊菩薩 二七日：釈迦如来 初七日：不動明王

図3 宝満山十三仏磨崖仏の種子配置図



拓本 1

拓本 2

図4 宝満山十三仏磨崖の拓本 1 と拓本 2
(拓本同士的位置関係・縮尺は任意)

の地藏菩薩の種子「カハ」であるが、種子のハの上に空点「・」を打ち、その下に莊嚴点と呼ばれる三日月形を付けているという特徴がある。十三仏は生者の逆修供養や死者の追善供養の年忌の時に信仰する十三の仏菩薩とされているため、地藏菩薩を上位に持つ意味は、死者の追善供養をより強く意図しているからではないだろうか。先ほど述べた種子への莊嚴点の付与も意図があることかもしれない。

考古学的に見ると、この十三仏種子は線の彫りが浅いことや彫り方が丸彫りであること、天蓋が形骸化していることから近世段階のものと推定できる。

b. 碑文1 (写真2、図4)

縦118cm、横46.5cm。上部は宝珠形を呈し、それ以外は直線的な線刻で碑文を囲っている。また枠外の最下部に蓮華座を線刻している。中央最上部に圓珍⁽⁵⁾を配し、その下部に五列縦に文が続く。右下にこの碑文を刻んだ弘有の名があり、同じ下段左に年月日が彫られている。釈読案は図5の通り。圓珍から連なる人々の名前を列挙し平石坊の来歴を記載したものと考えられる。同じ円の字を圓と円を使い分けている点や人名らしいものを一列上部に並べている点や、平石坊の上2つは圓を使い、他は円の略字を使うなど何かしらの意図があると思われるが、不明である。

c. 碑文2 (写真2、図4)

縦101cm (明瞭な範囲での計測値)、横は底部で40cm、上部で47cmと上のほうで広がっている。上部は不明瞭だが、圭頭形を呈し、それ以外は直線の線刻で碑文を囲っている。また枠外の最下部に蓮華座を線刻している。大きくは3列、縦にならび中央に弘有の名前が入る。釈読案は図6の通り。

碑文1と2の枠線上部の形状の差異は、碑文1の内容が平石坊の先師の追善供養であるため宝珠形で、碑文2が弘有の記念碑という文章を書き示すためのものであるから、木簡の上部形状のような圭頭形を呈していると考えられる。つまり碑文1と2の役割に応じて上部の形状は採用されていると判断した。但し、それぞれ蓮華座に乗っていることから上部の十三仏種子磨崖仏と同じく仏として扱われていると考えられる。

2. 釈読について

碑文1 (図5参照)

人名が列挙されているうち、判明しているのが圓珍、松尾重円、幸重である。圓珍は天台宗三代目座主の円珍を示す。松尾重円は、文禄2年(1593)7月段階での竈門神社宮司で、小早川隆景が宝満山に登ったときに対応したことが『竈門山旧記』に掲載されている「重円」と同一人物だと思われる。同記録では浄戒(坊)座主が没落して以後は衆頭を置けない時代があり、衆頭が不在のため宮司重円が対応していたと考えられる。幸重は平石坊幸重のことを示し、弘有の先代の衆頭である。開北院とは北院=喜多院を開くと理解でき、平石坊の隠居先であった喜多院が円徳の段階に作られたことが読み取れる。幸重の後の「刷之」も解釈が難しいが、「刷」は、「はく」と読め、これには「かきとる、けずる」の意味があるので、碑文に平石坊の歴史を刻み込んだという解釈をおこなった。

碑文2 (図6参照)

山門において権大僧都の僧位を任じられた。この場合の山門は天台宗延暦寺を指すと思われる。山門の後の文字は、森氏は「再」と読まれたが(森2000)、「爾」つまり助詞の「に」と読む方が文意は通りやすい。「傳灯大先達法印喜多院弘有」以下数文字が確認できる。これを森2000では「再興」と読まれているが、拓本を詳細に観察すると日佰(百の異体字)まで読め、その下に残字が認められる。敢えて読むと「一心」ではないだろうか。仮に一心だとすると、仏教用語の一心と考えられる⁽⁶⁾。大先達は峰入りの中心となる人物で、初めて新客として峰入りに参加してから四回入峰すると初先達となる。それから9回峰入りすると大先達となり、さらにそこから36回峰入りすると大越家となる(森2000)。ちなみに前の衆頭である平石坊幸重は「伝燈正大先達四十四世座主平石坊法印幸重大和尚」⁽⁷⁾という尊称で呼ばれており、構成が似ている。道晃親王の後の文字は解釈が難しいが、察役氏と読んでいる⁽⁸⁾。

【碑文1 釈読案】

円真 幸円 従有智山移 弘有散献^(カ)

円經 松尾重円 営之

圓珍 圓常 圓隆 平石坊 第々／先師

円徳 有在^(カ) 開北院

円能 幸重 刷之^(カ) 貞享三(丙)／刀(寅)四月日

【碑文1 読み下し案】

圓珍(より続く)

円真は、幸円を従えて有智山に移る

円經は、松尾重円と之(坊)を営んだ

圓常、圓隆と平石坊には代々の先師がいた

円徳が、喜多院を開いた

円能、幸重(とつないできた)之(平石坊の来歴)を(石に)刷いた

貞享三(丙)／刀(寅)二六八〇年 四月日

(平石坊)弘有 献呈する

図5 宝満山十三仏磨崖の碑文1 釈読案及び読み下し案

【碑文2 釈読案】

於山門爾任権大僧都

大和尚

傳灯大先達法印喜多院弘有

日佰一心^(カ)

謁道晃親王察役氏

越家

【碑文2 読み下し案】

山門において権大僧都を任じられ

大和尚(の位を頂戴した)

傳灯大先達法印喜多院弘有 日佰一心

越家(の位を頂戴した)

役氏を察する道晃親王に拝謁して

図6 宝満山十三仏磨崖の碑文2 釈読案及び読み下し案

3. 資料の位置づけと課題

碑文1にある「貞享三年丙寅」は西暦では1686年、江戸幕府は将軍綱吉の時代である。宝満山は弘有の積極的な活動により聖護院末山となっており、宝満山を末山と認識していた彦山とは激しい本末論戦の最中であった。この碑文が彫られた数年後の元禄元年（1688）には福岡藩の沙汰により弘有は禁固になり、下山させられている。つまり、この碑が刻まれたのは弘有の絶頂期だったと言える。本末論争の最中ということもあり、碑文1では座主である平石坊の来歴をきちんと記録することで権威付けしておきたかったのではないだろうか。また碑文1の上部にある十三仏と併せて平石坊の先達の追善供養を行ったものと考えられる⁽⁹⁾。

碑文2は碑文1と違い、弘有自身の顕彰である。天台宗山門において権大僧都の位階を授かり、大和尚となり、天台宗の中でも確固たる地位を得たこと、また聖護院との関係も密に取り、修験道においても越家という位階⁽¹⁰⁾を得たことを誇らしく自身の傳灯大先達法印喜多院弘有という尊称の両脇に添えている。この時点で隠居していたとはいえ、絶頂期であった弘有の記念碑だったとする森氏の指摘は首肯できる。

碑文に関係があることで取り上げると、延宝四年（1676）に弘有は聖護院親王（第35代門跡道寛法親王）逝去に伴い追悼のため上洛した⁽¹¹⁾。このときに道晃親王（第34代門跡）に謁見をしている。また弘有は当年の竈門山大峰修験者の宣度を勤め上げて大先達となった。

さて、十三仏磨崖仏自体の位置付けについては、弘有絶頂期の記念碑であるという従前からの森氏の指摘に加えて、今回の論考により新たに以下の四点の指摘を加えたい。

- ①碑文1には平石坊の来歴を記しただけでなく、碑文の上段にある十三仏種子を組みあわせることで平石坊の先師への追善供養の意味を強調したものと見える。
- ②碑文2では新たな釈読案を提示し、弘有が自身を仏教的にも修験道的にも地位が高いことを表したものと位置づけた。
- ③十三仏種子自体の分析を初めて行い、通常の種子配置でなく地藏菩薩を上位に配していること、また地藏菩薩の種子を荘厳化しているなど追善供養の強調が読み取れることを指摘した。
- ④碑文が彫られた巨石の立地について。この碑文を彫るに相応しい巨石を、貞享3年（1686）当時、衆頭であった弘有が平石坊の所有地であった座主跡周辺地で、平石坊の方向に岩が向いた場所を選んだ可能性があることを指摘した。

十三仏信仰について「山岳修験者や聖による布教により庶民への流通が逆修儀礼・葬送儀礼として見られるようになる」という指摘がある（奥村2010）。このような修験道と十三仏信仰の関わりについてのモデルを宝満山で認めることができるのか、それを検証するためにも広く資料を集めて分析を行う必要がある。ちなみに関西地方などでは中世後期から近世前半まで十三仏信仰が継続しているがその後は低調となるとされている。福岡県内での十三仏研究はあまり進んでいないが、類例としては古賀市では十三仏板碑一字一石経塚という珍しいものも見つかっている（古賀市2012）。また太宰府市内にも十三仏堂というものが数カ所残っているが、これらは大正期に建てられたものであり、太宰府及び周辺地域でどのように十三仏信仰が継続してきたかは不明瞭な点が多い。今後の課題の1つである。

宝満山には現在も未解明の多くの事象が眠っている。そのため『史跡宝満山保存活用計画』においても、調査・研究の重要性を上げている⁽¹²⁾。宝満山修験道の信仰の研究推進が課題だが、修験道の山伏が山中でどのように修行したのかその場や道など、文献上には現れている多くの場所も現地ですべて特定することは容易ではない。そこで、現状確認出来ている遺構・遺物などに関しては、

まず誰しも研究対象に出来るように資料化を進めていかなければならない。当然、それ以外の場所も悉皆調査や図化、測量を進めていく必要がある。

今回取り上げた十三仏磨崖仏⁽¹³⁾も宝満山山中の資料化の流れとして位置づけられる。

おわりに

以上、本稿では過去に紹介されてきた宝満山十三仏磨崖仏について、拓本によって碑文を詳細に検討し再検討を行った。これによって、十三仏磨崖仏を構成する十三仏種子、碑文1の平石坊先師の来歴、碑文2の弘有の顕彰はそれぞれ別々なものではなく、深く関係していることを確認した。特に宝満山内において、十三仏信仰が修験道に関わり追善供養として行われていた可能性があることは、重要な指摘だと考えている。今後も継続して宝満山中の石造物を研究することで宝満山の研究を進めると共に、九州地域での十三仏信仰についても併せて調査を進めていきたいと考えている。

小稿をなすにあたり、以下の方々にご協力・ご助言を得ました。記して謝意を表します。

狭川真一、朱雀信城、中村茂央、森弘子、山村信榮（敬称略、五十音順）

〔付記〕

- ・今回紹介した拓本1、2は平成16年（2004）10月に山村信榮氏によって採拓されたものである。今回、資料紹介という形で初めて世に出すことに許可を戴いた。記して感謝します。
- ・十三仏磨崖仏周辺の周辺地形図の作図は、令和2年（2020）11月に山村信榮・中村茂央の両氏によって作図された実測図である。今回、ご厚意により提供を受けた。記して感謝します。また十三仏磨崖仏の画像については個人撮影分をご提供いただいた。感謝します。

註

- (1) 寺の中心を意味する。宝満山の最盛期（古代～平安前期）には山裾の集落を含めた有智山（内山）・南谷・北谷の三所に僧坊が370あり、そのうち経説を学ぶ衆徒方が300坊、入峰など行をおこなう行者方が70であったとされる。弘治3年（1557）の太田宗麟による検地の後、翌年の永禄元年（1558）に寺僧（行者方）25坊はまとまって山上に坊宅を移したとされる（森2008）。
- (2) 弘有とは、平石坊弘有のこと。平石坊は宝満山中につくられた僧侶の住居＝坊のひとつ。弘有は、万治元年（1658）に若くして宝満山二十五坊の衆頭（山伏衆のリーダー）を務め長くその地位にあった。弘有は、室町期の戦乱によって衰退した宝満山の復興に尽力し、経典や仏具の寄進、講堂の再建、祭事の再興など数々の事業を実現したことから宝満修験道中興の祖とも呼ばれており宝満山の歴史を語る上で欠かせない人物と言える。
- (3) 森（2008）P405でも十三仏梵字をとりあげ、同様の評価を行っている。
- (4) 奥村（2010）P29「第三章 十三仏信仰の成立」を参照のこと。通例配置のものについては同書P84にて、片岡長治氏の十三仏の配列の型式分類が記載されており、この分類に当てはめると、宝満山十三仏磨崖仏はA1型三列四段式にあたる。
- (5) 円珍は、平安時代の天台宗の僧。延暦寺三代目座主で天台寺門派の宗祖である。この碑文で円珍が銘文の頂点に立つのは弘有の意図と考えられ、円珍の後を継いで弟子の増誉が建てた寺門派聖護院との強い繋がりを明示しているのだと思われる。なお、宝満山側からみると、最澄や円仁、円珍と入唐祈願や帰朝後の龍門大神への読経など天台宗との結びつきは強い。なお宝満山はその後、帰属を巡って延暦寺と石清水八幡宮の権力争いの舞台にもなっている。
- (6) 日百を日々と解釈し、日々一心に修行するという意味ではないかと考えている。また天台宗における一心三觀にも関係するかもしれない。
- (7) 『鎮西龍門山入峰伝記』による。
- (8) 役氏とは修験道の開祖とされる役小角を指すもので、察するとは良く調べるという意味があるため、役氏をよく知っている＝役氏の流れを汲む修験道本山派聖護院の親王に拝謁できるほどの地位であることを弘有が示したのではないだろうか。読みとその解釈について森氏から教示を頂いた。
- (9) 十三仏磨崖仏が彫られた岩の面は南西部を向いている。これは山影に隠れて直接は見えないが、ちょうど座主跡を向いていることになる。露頭した自然石を利用しているため、彫られた碑文の意味を考えたときに、土地を選ぶ際の方角を意図して場所を選んだ可能性も十分考えられると思われる。なお、座主跡とは座主坊主楞伽院の跡とされる。弘有が元禄元年（1688）に福岡藩により、禁固を受け下山した後、元禄6年（1693）になり3代藩主光之の側近藤井甚右衛門の弟、奈良一条院の住僧俊算を招いて、新たに座主坊楞伽院を立て、兼雅と改名させて

- 宝満山座主とした（宮家2012）。このことから平石坊から楞伽院への山中の所有地の移動もあったと考えられる。
- (10) 山伏は入峰の回数により昇進し、位階が決まる。越家は位階の1つで大先達より上位のものとされる（森氏教示）。なお宝満修験における位階については史料が残っていないため研究が進んでおらず詳細は不明である。
- (11) 聖護院は豊臣秀吉の命により烏丸今出川に移転したが、延宝の大火（延宝3年（1675）11月25日）により類焼してしまう。延宝4年（1676）に現在の土地に再興され、現在につながる寺院の姿となった。弘有が京都まで旅をして訪れた聖護院が、現在残っているものと基本的には同じものと考ええると、感慨深いものがある。
- (12) 同書P138の「第8章 調査・研究、第2節調査・研究のための方法、2. 総合的な調査・研究の推進（1）調査・研究の内容1）考古学的な調査・研究」や「2）図化作業」など。
- (13) 森氏から宝満山山中に他の十三仏の遺物が1点あるという教示を得たが今後の調査に期したい。また『筑前國續風土記附録卷之（十）』には上宮北に位置する稚児落としの近くに無明橋という石橋があり、その石橋の裏に伝教大師最澄が十三仏の種子を書き置いたという記事があり、十三仏磨崖仏との関係性が興味深い。

【引用・参考文献】

- 綜芸舎編集部編 1967『梵字入門』綜芸舎
- 小田富士雄1977『九州考古学研究 歴史時代篇』小田富士雄著作集I 学生社
- 中野幡能編著1980『筑前国 宝満山信仰史の研究』名著出版
- 渡辺章悟1989『追善供養の仏さま 十三仏信仰』北辰堂
- 森弘子2000『宝満山歴史散歩』葦書房
- 森弘子2008『宝満山の環境歴史学的研究』太宰府顕彰会
- 奥村隆彦2010『十三仏信仰と大阪の庚申信仰』岩田書院
- 古賀市教育委員会 歴史資料館2012『れきしのアルバムNo.1 十三仏板碑一字一石経塚』
- 宮家準2012「聖護院と地方本山派組織」『印度學佛教學研究』第60巻第2号 日本印度学仏教学会
- 太宰府市教育委員会編2013『宝満山総合報告書 -福岡県太宰府市・筑紫野市所在の宝満山に関する文化財の総合報告書-』太宰府市の文化財第118集 太宰府市教育委員会
- 筑紫野市・太宰府市編2020『史跡宝満山保存活用計画』筑紫野市・太宰府市

（たかはし・まなぶ 太宰府市教育委員会文化財課主任主査）